

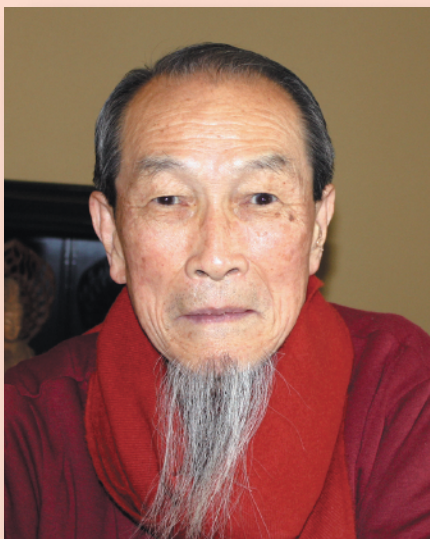


俳句

上野 燎
うえの りょう

山口市

(1927～2016)



【著作】

- 句集『野火』(昭和47・風発行所)
- 句集『尉鷗』(平成3・永田書房)
- 句集『望郷』(平成19・文學の森)

上野燎(本名上野五郎)は、昭和二年釜山生まれ。旧制山口中学校、旧制山口高等学校を経て、東京大学工学部卒業。

東大時代に、川口重美に兄事し、俳句をはじめめる。重美との問答の中で、「俳句ちゃあ何か？」と問うた燎に、重美は「俳句とは詩だ」と答えた。さらに重美は「詩とは驚きだ」と言った。このことが、その後の燎に俳句を生涯の友とする決心をさせた。以来、「風」(沢木欣一、細見綾子主宰)同人として、その終刊まで中心として活躍し、妻さち子との結婚は、その俳句人生の継続につながっていてもいる。その経緯については、晩年の相聞句集『山口にて』に詳しい。そこには青春、子育ての日々、そしてさち子との別れ……が、句と文章で綴られている。句は一貫して実相的で写生に徹し、潔い清潔な抒情性があった。

野火の後あざやかに径在りにけり
燃え下る野火岩々を確かめつ

右は、句集『野火』(風発行所)所載の句である。直截で、大自然の威に正面から立ち向かった氣息充実の作である。

昭和四十年、さち子とともに、「すばる俳句会」を立ち上げ、山口近在の俳人二十名余を育てたことは燎の大きな功績である。

句友館山實とは、山口大学で学部は違うが同僚となり、山口「風句会」をともし盛り上げた。

燎は、新制山口高校教諭、山口大学工学部助教、徳山工業専門学校教授などの職を歴任し、高専教授時代は教務主事として十二年をつとめた。

学園に裏山のある良夜かな

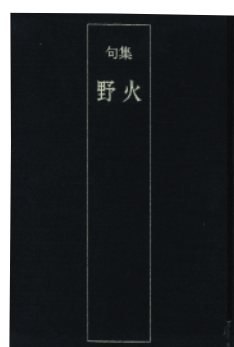
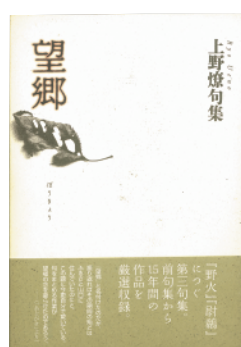
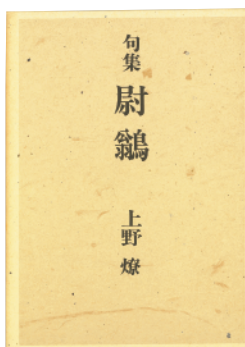
また、山口県俳句作家協会の理事、山口市俳句協会の会長をつとめ、朝日新聞山口版俳壇の選者(平成八年～平成十四年)として後進の指導にあたり、日本野鳥の会山口県支部長(昭和五十六年～平成九年)もつとめ、鳥を題材とした秀句を数多く詠んでいる。

高専退職後に、第二句集『尉鷗』、第三句集『望郷』を上梓。平成二十七年、妻さち子との合同相聞句集『山口にて』を上梓。

菊の酒我らなかなかには死なぬ

平成二十八年 病没。山口市常栄寺に眠る。

(文・秋吉康)



著書